

保母の精神衛生に関する諸要因の検討Ⅱ

——ストレスに関する諸要因の分析的研究——

○喜友名 静子 石川 清治 嘉敬 朝子
(沖縄キリスト教短期大学) (琉球大学)

I 研究目的

保母のストレスに関する諸要因の分析的研究を目的とする。本研究では、殊に(1) 保母自身の年令、(2)

保母の保育経験年数、(3) 担当する子どもの年令等のストレスに及ぼす影響を分析することを目的とする。

II 研究方法

研究の方法及び対象は、前頁に掲載された発表Ⅰ(嘉敬)と同じであるので省略する。

III 結果と考察

表Ⅰは、ストレス尺度の16の下位尺度のうち、諸要因によって有意な影響を受けている10等の下位尺度について平均値と標準偏差を示した。

各下位尺度別に、平均得点について経験年数(2)×担当児の年令(3)×保母の年令(2)の分散分析をおこなった。ちなみに各グループは以下の通りに分類した。経験年数：グループ1＝1年～5年、グループ2＝6年以上；担当する子どもの年令：グループ1＝1才～3才、グループ2＝4才～5才、グループ3＝その他；保母の年令：グループ1＝20才～30才、グループ2＝31才以上とした。

有意な主効果があったのは3下位尺度で、有意な交互作用が得られたのは3下位尺度であった。分散分析の結果の下値を表2の概括表に示した。以下にこれらの主効果と、交互作用について説明する。

(1) 主効果について

保育経験年数の主効果は(14)保母と保護者との関係においてのみ得られた。経験年数の多い保母のグループの方が、経験年数の少ないグループよりもストレスが高いという結果であった。

担当児の年令の主効果は(2)子どもの園内での行動において得られた。つまり年少児担当の保母の方が、年長児担当の保母よりもストレスが高かった。

保母自身の年令の主効果は、(16)問題行動のある子どもの保育への不安において得られた。この下位尺度は問題行動をもつ子どもの保育のしかたや関係機関の指導助言の内容への不満などを含む領域である。結果は若い保母のグループの方がストレスが高かった。

(2) 交互作用について

保母の年令×担当児の年令の有意な交互作用の得られた3下位尺度について、図1～3に図示した。

(1) 子どもの保育のしかたについては図1から分かるように、年少では保母の経験年数による差はみられなかった。年長児においては経験年数の少ない保母にストレスが高く、一方経験年数の高い保母はストレスが低かった。

同様に(6)子どもと保母との感情的なかわりにおいて、図2にみられるように年少児担当の保母には経験年数による差はなく、年長児担当においては経験年数の少ない保母の方が経験年数の多い保母よりもストレス得点が高かった。

(16) 外的基準との比較においては保育経験年数の少ないものには年少児、年長児ともにあまり差が認められないが、保母の経験年数が多くなるにつれて年少児担当者に比べてストレス得点が高い結果が得られた。

IV まとめ

以上に保母の保育にあたってのストレスのうち、10の下位尺度について検討を試みてきた。その結果、もっとも特徴的なことは、子どもの行動にかかわる下位尺度において、有意な水準がみられたことであった。主効果の3つの下位尺度についてのべると、経験年数の多い保母が保護者との関係におけるストレスが高いことは、これらの保母が若い保母に対して、保護者との関係で前面に出るためであろう。子どもの問題行動については年少児を担当する保母にストレスが高いことは、年少児の行動が予測をこえるものがあり、統制しにくいために保母にストレスをもたらしのであろう。最後に、若い保母に子どもの問題行動に対するストレスが高いことは、保母の経験不足によると考えられ、若い保母ほど子どもの行動をどのように扱ってよいのか迷う傾向があるといえよう。

次に交互作用について検討しよう。保育のしかたについて年長児を担当する保母の経験年数が少ないほどストレスが高い結果を示していたが、これは上記の子どもの問題行動に対する若い保母のストレスと同じように解釈できるだろう。子どもの保育にあたっての外的条件との比較のストレス得点が、年少児を担当する保母のうち経験年数が少ない保母に高かったがこれは経験年数の多い保母ほど、子どもの発達の姿をふまえているために、外的な基準との比較の上で悩むことが多いためであると考えられる。

(本研究に必要な統計解析は 琉球大学計算セン)ターを使用した。

表1 各条件におけるストレス尺度の下位尺度別の得点の平均値とSD

			1		2		3		5		6		7		8		9		14		16	
			ア	SD	ア	SD	ア	SD	ア	SD	ア	SD	ア	SD	ア	SD	ア	SD	ア	SD	ア	SD
総計			10.80	2.09	10.72	2.10	9.61	2.14	9.01	2.11	7.26	2.07	8.81	2.26	8.88	2.23	9.17	2.50	9.04	2.15	9.10	2.05
年 令 1	計		10.92	2.15	10.75	2.14	9.64	2.20	8.98	2.13	7.13	1.93	8.95	2.23	8.97	2.36	9.08	2.47	9.07	2.15	9.36	1.91
	経験年数 1	計	10.77	2.18	10.57	2.25	9.67	2.24	8.87	1.96	7.29	1.86	9.19	2.03	9.13	2.36	9.30	2.34	8.48	2.28	9.27	1.81
		担当児 1	10.47	1.92	11.60	1.96	10.29	2.37	8.73	1.44	7.13	1.51	8.93	1.33	9.87	2.03	9.33	1.88	9.21	1.67	9.83	1.47
		担当児 2	10.88	2.28	10.20	2.25	9.46	2.18	8.92	2.14	7.35	1.99	9.29	2.25	8.85	2.43	9.28	2.51	8.21	2.43	9.10	1.89
	経験年数 2	計	11.17	2.11	11.06	1.94	9.58	2.18	9.15	2.40	6.89	2.04	8.58	2.51	8.71	2.37	8.72	2.68	10.06	1.48	9.50	2.08
		担当児 1	12.38	2.28	11.38	2.03	10.00	2.14	10.00	2.03	7.75	1.77	9.40	2.61	9.33	2.26	8.73	2.58	9.79	1.48	9.77	2.28
		担当児 2	10.16	1.30	10.76	1.86	9.22	2.21	8.39	2.50	6.16	2.01	7.89	2.27	8.21	2.39	8.71	2.85	10.29	1.49	9.29	1.96
	年 令 2	計		10.44	1.90	10.62	2.01	9.52	1.98	9.10	2.06	7.61	2.42	8.37	2.32	8.59	1.78	9.48	2.63	8.92	2.17	8.25
経験年数 1		計	11.13	1.13	11.43	0.98	9.71	1.98	10.00	2.83	7.50	1.76	8.00	2.12	8.33	2.34	10.50	3.87	9.00	1.15	8.00	1.00
		担当児 1	11.00	1.00	12.50	0.71	8.50	2.12	12.00	4.24	8.00	0.0	6.50	2.12	7.00	2.83	8.50	2.12	9.00	1.41	9.00	0.0
		担当児 2	11.20	1.30	11.00	0.71	10.20	1.92	8.67	0.58	7.25	2.22	9.00	1.73	9.00	2.16	12.50	4.95	9.00	1.41	7.50	0.71
経験年数 2		計	10.21	2.06	10.36	2.19	9.45	2.02	8.92	1.89	7.64	2.58	8.45	2.40	8.67	1.65	9.29	2.41	8.90	2.34	8.29	2.47
		担当児 1	10.50	1.60	11.13	2.10	10.50	2.17	9.50	2.00	7.88	2.47	8.14	2.19	8.43	1.51	8.17	0.98	9.80	1.92	7.80	3.77
		担当児 2	10.06	2.29	9.93	2.20	9.06	1.88	8.63	1.82	7.53	2.70	8.60	2.58	8.79	1.76	9.73	2.67	8.60	2.44	8.44	2.06

表2 経験年数×対象児の年令×保母の年令の分散分析の概括表

				(数値はF値)			
下位尺度		主 効 果		下位尺度		交 互 作 用	
変 動 因	(2)	(4)	(16)	変 動 因	(1)	(6)	(7)
1. 保母の経験年数		5.864*		1×2	6.538*	4.026*	4.902*
2. 担当児の 年令				1×3			
3. 保母の 年令	6.968*		4.898*	2×3			

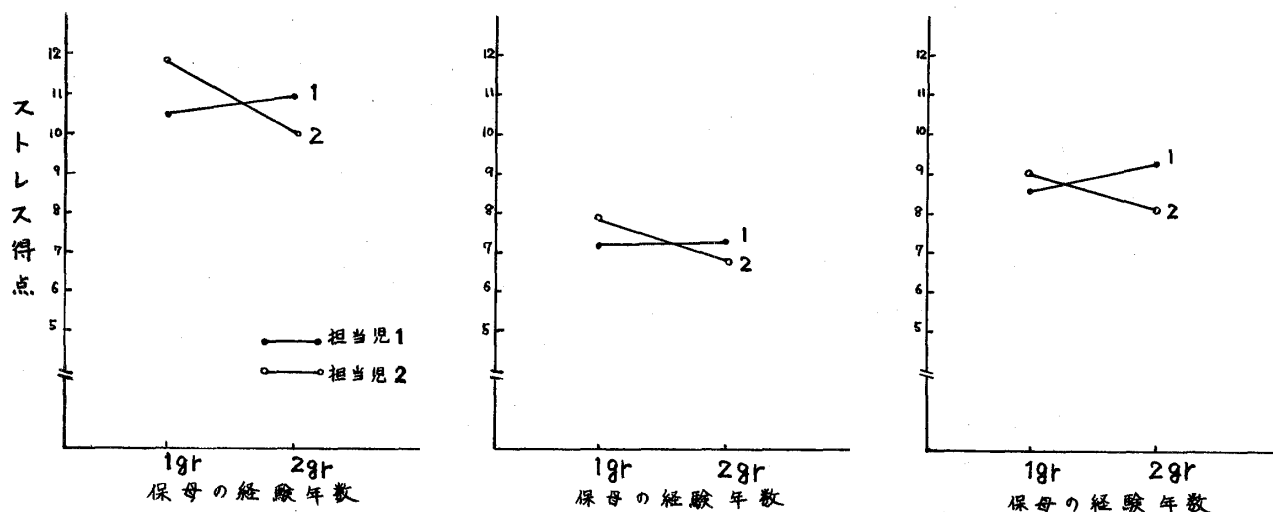
* $P < .05$ 

Fig 1 保母の年数×担当児の年令の交互作用について